猪苗代にある初代田中正玄墓

正玄（まさはる）の言葉
「自分は元より、学浅く聖賢の業及びがたいが、君を正し、士を撫（ぶ）し、民をあわれむの三つを基本とし、公正いささかも私心なければ非義のそしりは受けない」

小田山にある６代田中玄宰墓

玄宰の若い時
分からないことがあると納得するまで、自分で調べ、実践する性格だったという。
二十九歳の時、一ノ瀬要人（かなめ）、町人ら約十五人で、物頭の家で酒宴をし、「御叱り」を受けたほど、下からの人望が厚かった。

田中玄宰（はるなか）

『若松市史』『会津藩教育考』によると、田中家の祖玄義（はるよし）は、伊勢国出身で武田信玄の子勝頼が信州高遠城主だった時に仕え、長篠の戦いで戦死します。その後、高遠城主となった保科正之に見いだされ一字を貰い正玄（まさはる）と名乗り、筆頭家老として四千石となります。六代目玄宰は「寛延元年（一七四八）生、十三歳で千石の家督、天明元年（一七八一）三十三歳で家老となります。そのころの会津藩は、八代将軍徳川吉宗の享保の改革を受け、会津藩も改革していましたが財政は改善せず、五七万両（約三四〇億円）の借金を大坂と江戸の商人にしていました。さらに天明二年（一七八二）～七年まで、六年間続いた天候不順と浅間山大噴火によって大飢饉となりました。天明四年（一七八四）、玄宰は病気を理由に家老職を辞めます。しかし同年十二月、保科正之がまとめた『十五条の家訓（かきん）』と『二程治教録（にていちきょうろく）』（中国北宋の学者明道と伊川兄弟の著述を集めたもの）を参考に次の八項目を建議しました。

①軍備の充実
②学術教育を振興
③財政の立て直し
④刑罰法を定める
⑤人材の登用
⑥賞罰の明確化
⑦上下身分の徹底
⑧民政の秩序改革

家老の北原と三宅は賛成し、高橋は反対しましたが、五代藩主容頌（かたのぶ）の命により改革が決められ、翌天明五年（一七八五）玄宰は家老職に復帰し次の改革を進めました。

①軍備の兵法を、可陽流から長沼流へ変更。
②玄宰が江戸にいた時、熊本藩の古谷重次郎から教えられた改革するため「日新館」を創設。
③四人の家老職は、月番制から担当制とします。
　○軍備は北原采女（うねめ）
　○民政と財政を玄宰
　○公事（裁判）を三宅孫兵衛

享和三年（一八〇三）には大老となり、
○幕命による「風土記編纂」の開始
○会所前への目安箱の設置
○間引きを禁止し、里子制度により人口増加
○連帯性として五人組制度の強化
○下級藩士への開墾の奨励
○越後からの開墾農民の受入れ

産業振興として
○漆木を植栽し、漆の確保と蝋燭の増産
○京から蒔絵職人を呼び指導
○灘から杜氏と麹職を呼び「清美川」の製造
○会津本郷焼の改良のため鍋島藩への潜入
○朝鮮人参の増産

家臣林和右衛門光治（四五〇石）を商人にし（家は市苗育苗施設）越後に「永宝丸」を持ち商売で成功、分家に鶴乃江酒造、林合名会社がいます。

会津藩校「日新館」は、享和三年（一八〇三）に完成、水戸の弘道館、萩の明倫館とともに三大藩校の一つで、全国トップクラスの人材育成に大きく貢献しました。改革は軌道に乗りますが、文化三年（一八〇五）藩主容頌が死去し、六代容住（かたおき）も五カ月で病死、玄宰は文化五年（一八〇八）六十一歳で没します。田中家墓所は天寧寺ですが遺言により、

「鶴ヶ城と日新館の見えるところに埋めてほしい」

と小田山山頂に墓が建てられます。

その後、会津藩主は、三歳で七代目となった容衆（かたひろ）は二〇歳で子も無く死去したため、水戸家二男の子を貰い七代の弟として嘘の届けをし、八代目となった容敬（かたたか）が三十一年間治世をしました。子孫は早稲田大学総長田中愛治氏。

図・写真・文　©石田明夫2018　問合せ　TEL・Fax 0242-24-3423　090-1378-8087
メール・ホームページ「会津歴史観光ガイド協会」で検索。